

秋田県文化財調査報告書第38集

新秋田空港周辺遺跡
鹿野戸遺跡
石坂上遺跡
発掘調査報告書

1976・3

秋田県
埋蔵文化財調査報告書
第38集

秋田県教育委員会

序

秋田県河辺郡雄和町鹿野戸遺跡・石坂上遺跡は縄文時代中期の遺跡で、住居跡、石器、土器などの出土で注目されていましたが、新秋田空港建設地に隣接する地域があるので、この度緊急発掘調査を実施いたしました。

本報告書が県内に所在する遺跡の解明と保存への一助になれば幸いと思います。

調査を担当されました各調査員、ご協力をいただいた雄和町教育委員会の方々に深く感謝の意を表します。

昭和51年3月

秋田県教育委員会

教育長 畠山芳郎

目 次

I 調査に至るまでの経過	1
2 調査の構成	1
3 遺跡の立地	1
I 鹿野戸遺跡	3
① 調査方法と過程	3
② 遺構と遺物	5
③ まとめ	11
II 石坂上遺跡	19
① 調査方法と過程	19
② 遺構と遺物	19
③ まとめ	21

挿図・図版目次

鹿野戸遺跡

遺跡周辺地形図	2
挿図1 遺跡全体図	4
挿図2 発掘区域と遺構	5
挿図3 住居跡	6
挿図4 住居跡 炉	7
挿図5 1号フラスコ状ビット	7
挿図6 2号フラスコ状ビット	8
挿図7 土器拓影	9
挿図8 土器拓影	10
挿図9 石器・石製品	11
図版1 遺跡遠景・発掘調査のようす	12
図版2 竪穴住居跡	13
図版3 土器出土状態	14
図版4 2号フラスコ状ビット	15
図版5 出土土器	16
図版6 出土土器	17
図版7 出土土器・石器	18

石坂上遺跡

挿図1 遺跡地形図	19
挿図2 遺構配置図	19
挿図3 1号竪穴遺構	20
挿図4 2号竪穴遺構	20
挿図5 3号竪穴遺構	20
挿図6 4号竪穴遺構	20
挿図7 土器拓影	21
図版1 遺跡遠景、1号・2号竪穴遺構	22
図版2 3号・4号竪穴遺構、出土土器	23

新秋田空港周辺遺跡・鹿野戸遺跡・石坂上遺跡発掘調査報告書

1. 調査に至るまでの経過

秋田県では、秋田市割山にある秋田空港が将来ジェット機の発着を考えると、市街地に近く手狭であり、その上、海辺に近く海岸線に並行に滑走路が設置されているため、冬期の気象条件が飛行機の発着際に好適とは言えないことなどの理由から、新秋田空港の建設を計画して、予定地を他に求めることにし、数ヶ所に候補地を上げていた。

昭和48年に三つの候補地の内の一つ、河辺郡雄和町の出羽山地地域に2kmの滑走路を持つ新秋田空港建設が決定し、昭和49年度から新秋田空港開発工事のための取付道路工事、拡幅道路工事がはじまった。このため、この道路近くやこの道路に至る路線付近に所在する周知の遺跡を、事前に発掘調査し、遺跡の性格を解明すると共に記録保存し、今後の研究資料に供するため、本年度「鹿野戸遺跡」「石坂上遺跡」の二遺跡を緊急発掘調査したものである。

2. 調査の構成

調査期日 昭和50年10月17, 18, 19, 20, 25, 26, 27日

調査主体 秋田県教育委員会

協力団体 河辺郡雄和町教育委員会

調査場所 河辺郡雄和町椿川字鹿野戸 101番地。同石坂上13の33番地

調査員 伊藤種秋 由利郡東由利町玉米小学校教諭 (日本考古学協会会員)

岩見誠夫 秋田市立八橋小学校教諭 (日本考古学協会会員)

永瀬福男 山本郡山本町立森岳小学校教諭 (日本考古学協会会員)

調査事務担当者

秋田県教育庁文化課 門間光夫 主任学芸主事

河辺郡雄和町教育委員会 佐々木金也 社会教育係長

調査協力 河辺郡雄和町役場土木課

河辺郡雄和町椿川部落有志

3. 遺跡の立地

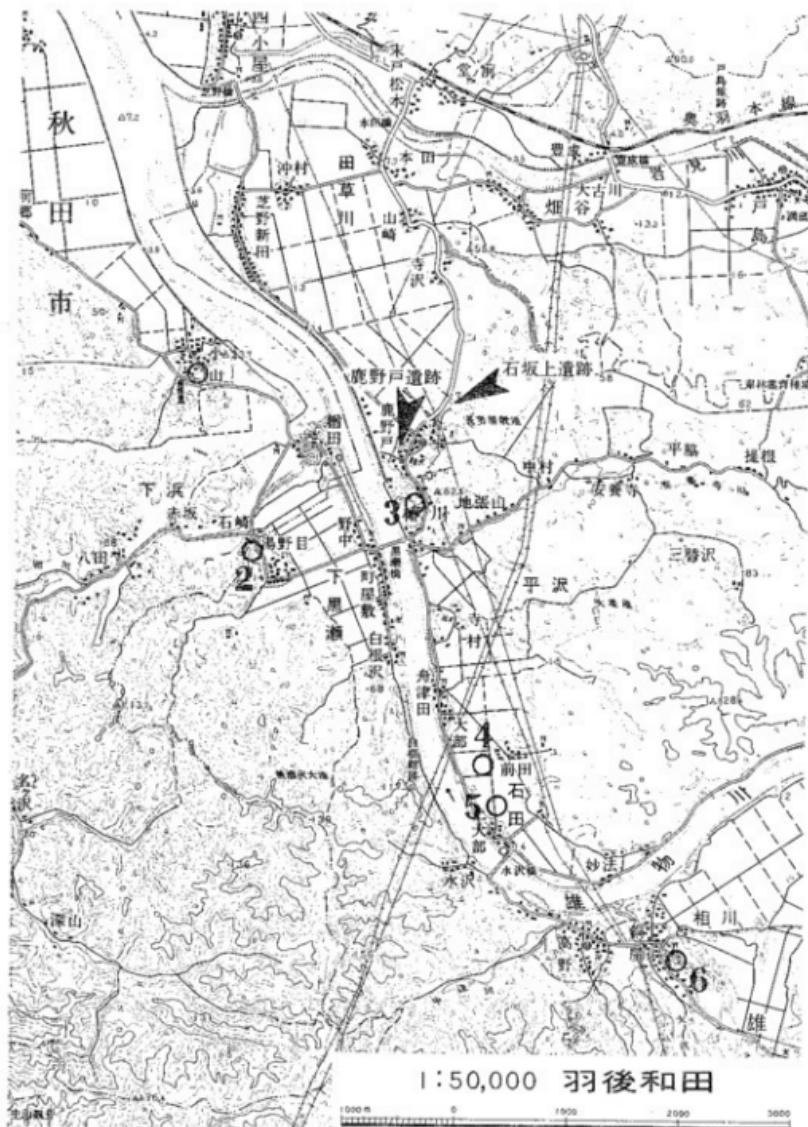
秋田県の海岸寄りの地域を、南北に走行している出羽山地は、南から子吉川、雄物川、米代川の三大河川によって大きく分断されている。

雄和町は、この雄物川が出羽山地を分断して、秋田平野に流れ込む地域を占めており、大正寺村、戸米川村、穂平村、川添村が合併して出来た南北に細長い町である。

町の中央を雄物川が流れ、その岸を県道が通り、それに沿って南から新波、川崎、高野、舟津田、椿川等の集落が点在する。

椿川は、雄物川の東にある出羽山地の末端が、雄物川岸に舌状に張り出した台地の縁辺に当たり、

遺跡周辺地形図



- 繩文土器散布地 (1. 狐森遺跡 3. 袖ノ沢遺跡 6. 銅屋遺跡
 ● 土師器、須恵器散布地 (2. 湯野日遺跡 4. 平沢遺跡 5. 石田遺跡)

標高15~20mの平坦面を持っている所である。ここはかっての川添村中心集落で、県道添いに家が集まっており、下の沖積地水田面との比高は5~10m程度である。

鹿野戸遺跡は、この集落のはば中心、県道西側の台地縁の畑地にあり、石坂上遺跡は集落北のはずれに存在する長者屋敷池の傍に位置し、遺跡の一部は現在とりくづされ、砂利置場となっている。

周辺には遺跡が多く、地続きの袖ノ沢には縄文期の遺跡があり、県道東側の川添小学校の後にせまる山際から、歴史時代の須恵器の出土を見ている。また、雄物川をへだてた対岸の豊岩地区にも遺跡があり、ややはなれた同町石田、平沢の畑地や水田下には、土師器、須恵器を出土する遺跡が存在する。

I 鹿野戸遺跡

① 調査方法と過程

遺跡は、渡辺慶治氏と堀井市太郎氏所有の大豆、小豆畑に所在し、表面採集の遺物等から、縄文中期と後期のものであることが確認されていた。

堀井氏所有の畑は、戦後のある時期に一部発掘されておるため、調査区をそれ以西とし、渡辺慶治氏所有の取穂の済んだ小豆畑にグリッドを設定し、調査を実施した。

グリッドは、2m四方のもので、算用数字とアルファベットの組み合せで呼び、位置づけることにした。

〈調査日誌〉

10月17日（金） 晴

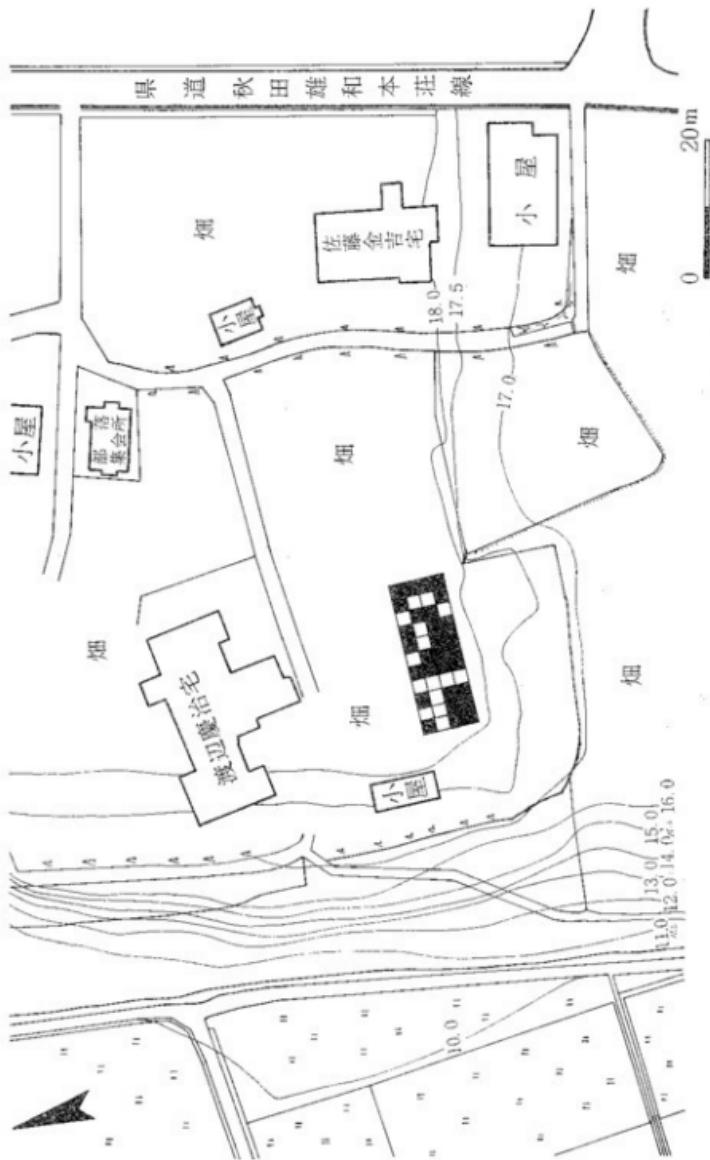
8時30分、雄和町公民館に調査員参集。9時30分遺跡到着。種り入れの済んだ小豆畑にグリッドを設定し、東隅A1から発掘に取り掛る。地山まで約30~40cmの茶褐色土が単一層として続いている。畑作による搅乱が多く、地山直上から石片、縄文土器細片が出土、A1、B1の境から深さ30cm程のピットが発見される。しかし埋土は搅乱。

グリッド西端D10、11から柱穴状のピット、D20から炉が発見され、住居跡の存在が確認される。この層の北西隅からプラスコ状のピットが検出される。

10月18日（土） 晴

C5、6、D5、6から周囲に柱穴を持つプラスコ状ピットが発見され、完掘を目指して作業を続行する。10時と11時の2回にわたり、近くの川添小学校4、5、6年児童約120名職員に引率されて見学に来跡。

午後、県文化課門間光夫主任学芸主事、同中谷雅昭学芸主事来跡、調査の指導にあたる。町土木課職員遺跡周辺の地形測量を行う。



掉圖1 遺跡全體圖

10月19日（日） 晴のち曇

C 20, 21, D 20, 21の住居跡の写真撮影と実測を行う。また C 5, 6 のフラスコ状ビットの実測を行う。工藤町長、堀井助役、田村教育長、伊藤町文化財審議会長見学に来跡。

10月20日（月） 曇

午後一時から昨日とり残した遺構部分の実測を行う。3時過ぎから、調査の済んだグリッドの埋戻しを行ない5時調査を終了する。

② 遺構と遺物

〈遺構〉

発掘調査によって発見された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝状遺構、1号、2号と呼ぶフラスコ状ビットである。1号フラスコ状ビットは竪穴住居跡に伴うものである。

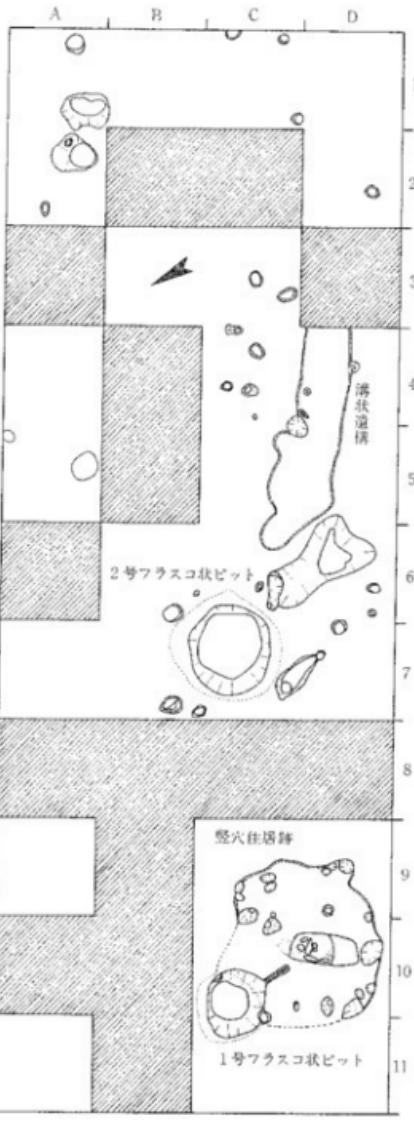
竪穴住居跡（挿図3、4 図版2）

調査区 C 9, 10, 11, D 9, 10, 11で発見されたもので、北西の部分が廻作のために削平されていた。

長径3.70m、短径3.15mの不整円形のものと考えられ、南と東に残る壁から推察すると、地山を10cm程度掘り凹めて床としたもので、中心部より南にかけて炉が存在する。

壁はやや急に立ち上がり、床はほぼ平らで、柱穴は壁のそばや住居跡内にのみ存在する。

炉は長辺1.33m、短辺0.75mの隅丸状の長方形を呈し、住居跡の床面を15~20cm掘り込んで作っている。炉の中央には7個の礫が遺存しており、石間であったと思われる。この礫の外側に挿図8(1)、図版7(2)の土器が埋設されていた。土器は残存部の径が15.5cmあり、縄文の施文された底部の無いものである。炉の床には、縄文の施文された土器小片が、20個ほど存在した。炉の中や周囲に



挿図2 発掘区域と遺構

ある焼土は3cm程の厚さで、赤褐色に固く焼けてしまっていた。

炉は最初長径1.33mの規模で作り使用しており、のちになって粘土質土で南側の部分を埋め0.88mに縮小している。

炉の延長線上に当たる南壁に近い所の小ピットには、頭部を炉の方に向け埋設されていた石棒があった。全長12.6cmの破損品で折損部に使用痕があり、傍に縄文の施文されたやや大きい土器片があった。

住居跡の北西部は、耕作のため壁の部分が削平されて存在しなかった。しかし、ここから1号と呼ぶフラスコ状ピットが発見された。このピットは地山を突き抜け、その下の砂利層まで掘り込んで作ってあった。挿図7(1)の土器は1号フラスコ状ピットから、(2)の土器は住居跡床面から発見された。(3)の土器は、それ

よりも上位の耕作土中から出土である。

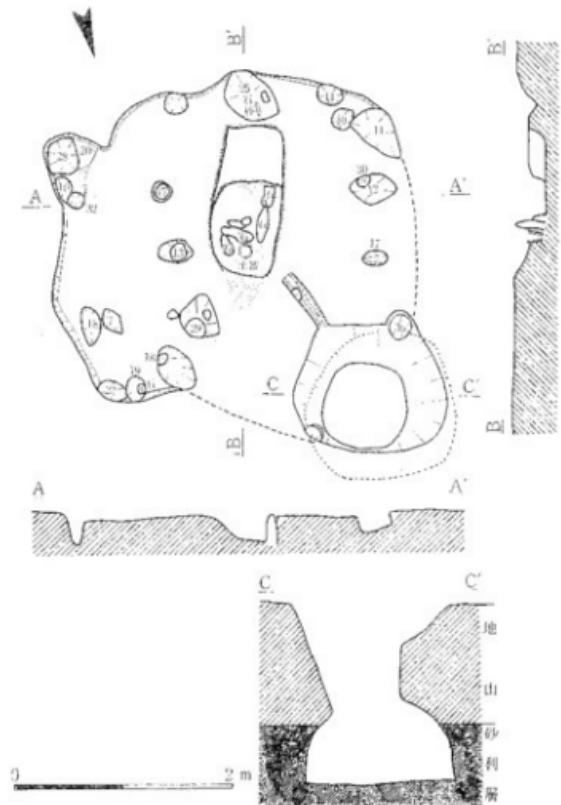
フラスコ状ピット

1号ピットは、住居跡に伴うものであり、2号ピットはB6, 7, C6, 7で発見され、周間に柱穴が伴うと考えられるものである。

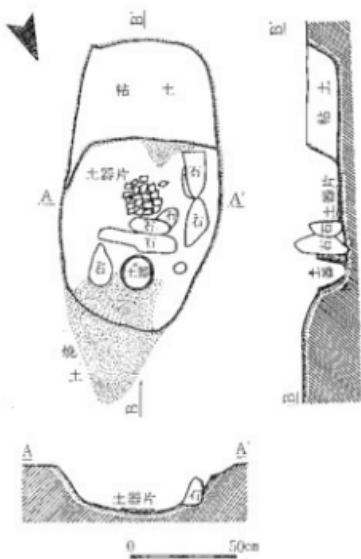
1号ピット（挿図3, 5, 図版3）

口径1.33m, 底径1.48m, 深さ1.68m, 頭部径0.97m, 頭部までの深さ1.14mを測る。

床面は、地山を掘り抜いてその下の砂利層内にあり、不整円形を成している。3種類の充填土から成り、頭部より下部に存在する暗褐色土中には、地山の崩壊土と考えられ



挿図3 住居跡



挿図4 住居跡

る粘土質土のブロックが数多く存在した。

出土遺物は土器のみで、それも殆んど下部の充填土の暗褐色土からのものである。また図版3に見られる如く、住居跡の外側に当たるピットの北半分からの出土が多かった。

2号ピット（挿図6 図版4）

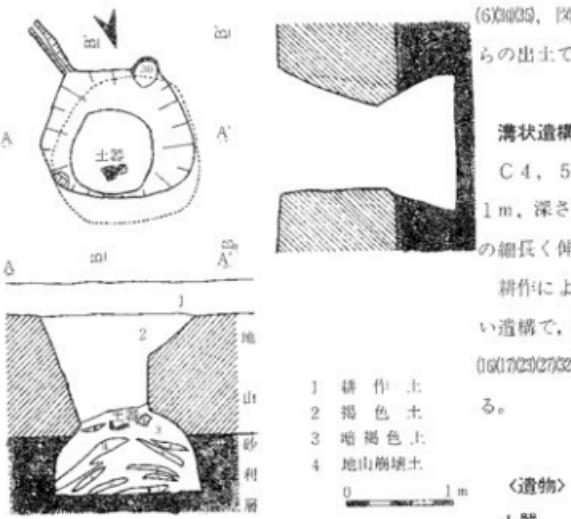
口径1.90m、底径2.26m、深さ2.04m、頭部のあまりくびれていない周囲に柱穴のあるピットである。4種類の充填土から成り、1号と同様下部の暗褐色土には、地山と同質と考えられる粘土質土のブロックと小石が、数多く含まれていた。砂利層を掘り込んで作った床の中央部延1mほどの範囲に、地山と同質と考えられる粘土質土を敷いていた。またその部分には、火を使用したような痕跡はなかった。床面に近い部分の埋土は小石が多く、1号とはちがって水分の非常に多いものであった。

出土遺物は、少量の土器片のみである。挿図7(6)(3)(3)、図版5(6)、6(3)(3)の土器は、床面直上からの出土である。

溝状造構

C4、5、6、D4、5、6で発見された幅約1m、深さ0.15~0.20m、調査部分の長さ4.2mの細長く伸びる造構である。

耕作による擾乱土が底面まで至っている所の多い造構で、性格は不明である。挿図7(9)(10)(10)(10)(17)(23)(27)(32)(33)の土器は、この造構からの出土である。



挿図5 1号フラスコ状ピット

発掘調査によって出土した土器は、すべて縄文

時代のもので、施文文様、器形等によって
6類に分類できる。

第1類土器（挿図7(1)～(2) 図版5(1)～ (2)）

磨消繩文手法の見られる土器で、胎土に雲母片を含んでいるものである。文様部を沈線で画し、その後に繩文を施文している。挿図7(4)(7)(8)は同一個体で、文様部が帯状の曲線を描いている。器壁の厚さ0.8cmで2号フラスコ状ビットからの出土である。(6)は無文部の器壁が鱗状に盛り上っており、(3)(5)の土器片と2号フラスコ状ビット床直上で共伴していたものである。(6)(1)は同一個体で、内側の器壁が黒色土器の様に黒色を呈している。

第2類土器（挿図7(3)(4) 図版5(3)(4)）

口縁部の小破片で、棒状工具での刺突あるいは押し付け文のある土器である。胎土に雲母片を含む。(3)の土器の刺突文は右から行っている。

第3類土器（挿図7(5)(6)(7) 図版5(5)(6)(7)）

磨消繩文手法の見られる土器であるが、沈線で画された文様帶の中に、沈線に平行に刺突文の見られる土器である。

(5)は細い爪形状の刺突文が付され、(6)(7)は竹ひごの様な細い工具で刺突文したるものである。(6)は灰白色を呈し、表面はかなり風化している。これ等の土器は、溝状遺構からの出土である。

第4類土器（挿図7(8) 図版5(8)）

赤褐色をした一小破片で、土器表面にくし目状の文様がある。本類はこれ一片のみで、1号フラスコ状ビットからの出土である。

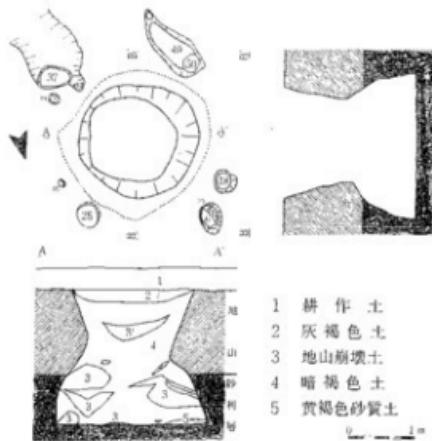
第5類土器（挿図7(9)～(12) 図版5(9)(10), 6(21)～(23), 7(1)）

磨消繩文手法で、入組文の見られるものである。繩文は第1類土器に比べ細かい。

(9)は土器片の内外面が黒褐色を呈する。(10)は繩文外側の沈線が一部で8字を成している。(12)は繩文はないが、沈線による文様構成が、(21)(22)(23)と同じもので、褐色を呈する。溝状遺構からの出土で、図版7(1)の注口土器と同一個体である。

第6類土器（挿図7(13)、図版6(23)）

A1出土のもので、この類はこれ一片のみであり、黒色を呈し、器壁は薄く、表面に羊齒状文があ



挿図6 2号フラスコ状ビット

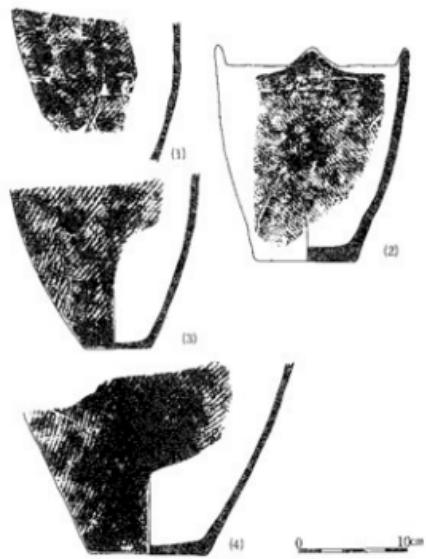


插图7 土器拓影

る。

第7類土器（挿図7(30)～(39), 8(1)～(4) 図版

6(30)～(39), 7(2)～(5)



挿図8 土器 拓影

縄文のみ施文された土器である。挿図7(30)と(39)は同一個体であり、挿図7(6)と共に2号フラスコ状ピット床面直上からの出土である。(36)は竪穴住居跡の石棒と共に伴のものであり、挿図8(1)は竪穴住居跡の炉に埋設されていたものである。破損品で、残存部の径は16cm、器壁の厚さは0.6cmと薄い。

挿図8(3)(4)(5)は1号フラスコ状ピットからの出土である。

(3)は破損品で、推定口径18cm、底径9.1cm、器高20cm、器壁は0.7cmある。口縁は4つの頂部を持つ波状をなす様である。頸部に浅い沈線、そしてそれ以下に縄文の施文されているものである。(4)は上部から見ると、楕円形に器のゆがんでいるものである。(3)(4)(5)は胎土、焼成とともに類似したもので、茶褐色を呈している。いず

れも、1号フラスコ状ピットの床面より、60cmほど上位の所から出土したものである。

表採土器（挿図7(30)～(39) 図版6(37)～(39)）

A 1, 2, 3, B 1, 2, 3からの採集品である。37～39は第5類に、36は第3類に入る。

石器、石製品

磨製石斧、凹石、石棒、鳥を思わせる石製品がある。

磨製石斧（挿図9(1), 図版7(6)）

C 1から出土した現存長4.2cmの粗粒玄武岩か凝灰岩質のもので、破損品である。

凹石（挿図9(4), 図版7(7)）

C 4から出土の石英班岩の礫で作られている。すり石としても使用されたと見て、全面つるつるしている。特に側面と下面が著しい。

石棒（挿図9(3), 図版7(9)）

現存長12.6cm、最大径3.9cmの石棒の頭部に近い部分の折損品で、石質は石英安山岩である。折損部分に使用痕があり、頂部に深さ0.3cmの凹のあるものである。竪穴住居跡からの出土である。

石製品

凝灰質砂岩のもので、各面ともすらされている。長さ 4.2cm あり、鳥を思わせるものである。

表採品・石匙

珪質岩の模型の小さいものである。

③ ま と め

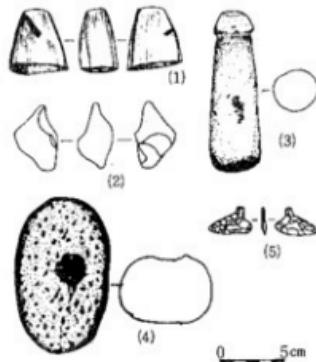
鹿野戸遺跡から出土した第1類～第3類土器は、縄文中期末のものと考えられ、その縄年の位置は大木10式期のものと思われる。第5類の土器は縄文後期のものと考えられ、第6類は縄文晩期大洞BCのものである。第4類ははっきりしないが、第1～3類に近い時期のものと見たい。第7類挿図7(3)(4)(5)の土器は、第1、2類の土器と竪穴住居跡や、2号フラスコ状ビットで共伴関係にあるため、大木10式期のものと思われる。

すなわち、発見された竪穴住居跡、2号フラスコ状ビットは縄文中期末、構造遺構は縄文中期末～後期の時期が考えられる。

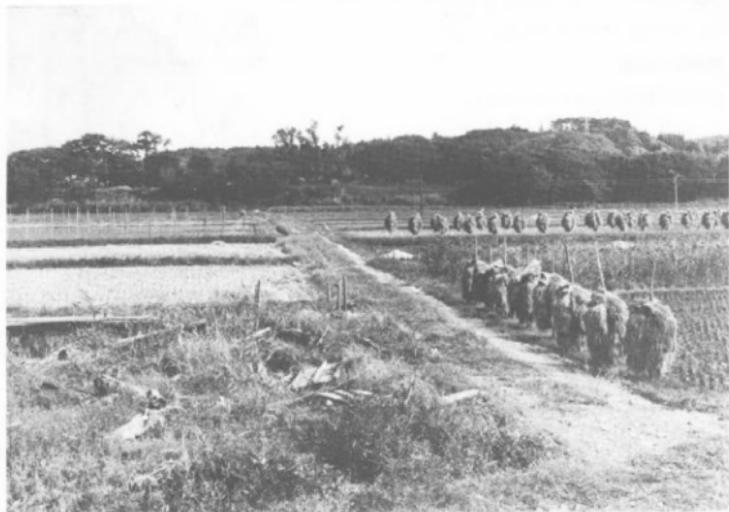
さて、平面プランが不整円形で、小型の竪穴住居跡は、協和町米ヶ森遺跡や、秋田市坂ノ上遺跡の住居跡に類似点を持つものである。また、秋田市下堤遺跡のように住居跡内にフラスコ状ビットを有すこと、八竜町萱刈沢貝塚F P 6 のように単独で周囲に柱穴を持つフラスコ状ビットの発見は、縄文中期末の住居のあり方と、フラスコ状ビットの持つ性格を考える上で大切な資料といえる。

参 考 文 献

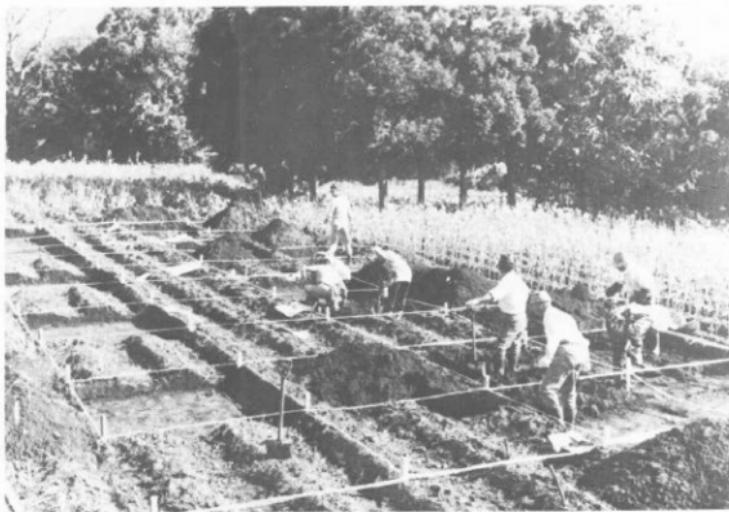
- ・協和町教育委員会「米ヶ森遺跡発掘調査報告書」昭和46年
- ・十和田町教育委員会「黒森山麓縄文期竪穴群」昭和49年
- ・富樫泰時「秋田市柳沢遺跡発見の住居跡」月刊考古学ジャーナル No99
- ・八竜町教育委員会 第2次概報「萱刈沢貝塚」昭和48年 第3・4次概報「萱刈沢貝塚」昭和49年
- ・秋田市教育委員会「概報第4次下堤遺跡」昭和47年
- ・秋田市教育委員会、秋田考古学協会「小河地地区遺跡分布調査概報、坂ノ上遺跡」昭和50年
- ・青森県平賀町教育委員会「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」昭和49年
- ・青森県教育委員会「むつ小川原開発地域関係埋蔵文化財試掘調査概報」昭和49年
- ・宮城県南方町「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」昭和50年
- ・草間俊一「日本原始時代の生活についての一考察—フラスコ状竪穴に関して—」岩手地方史の研究 昭和44年
- ・その他



插図9 石器・石製品



遺 跡 遠 景



発掘調査のようす

図版2



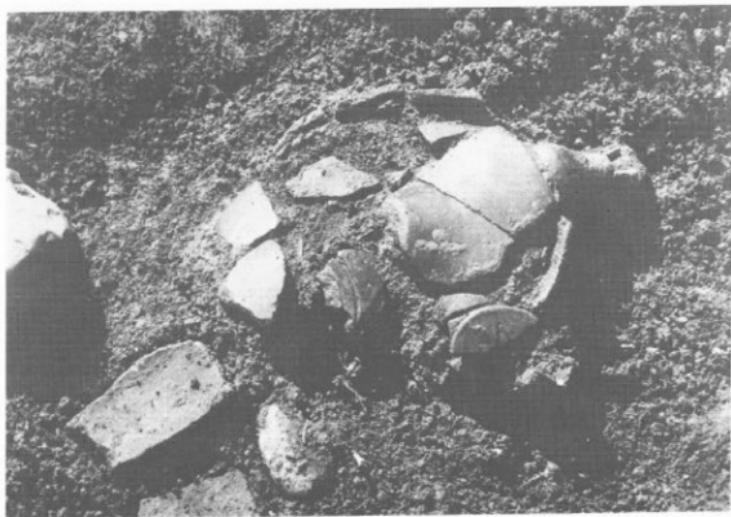
豎穴住居跡



石棒の出土状態

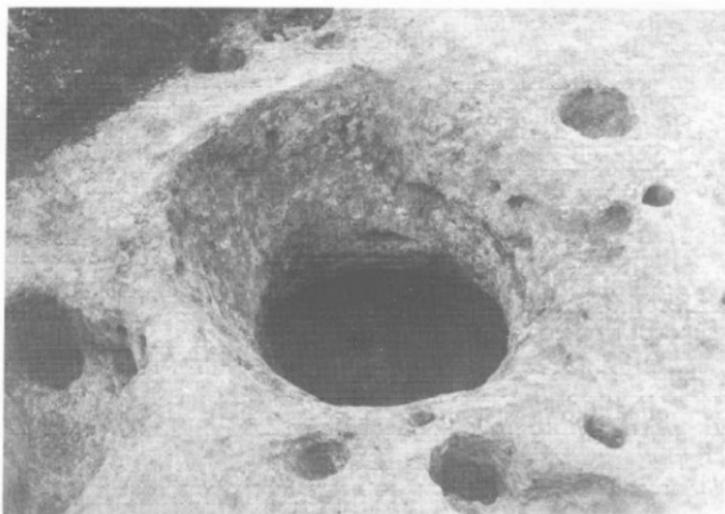


1号フラスコ状ピット土器出土状態

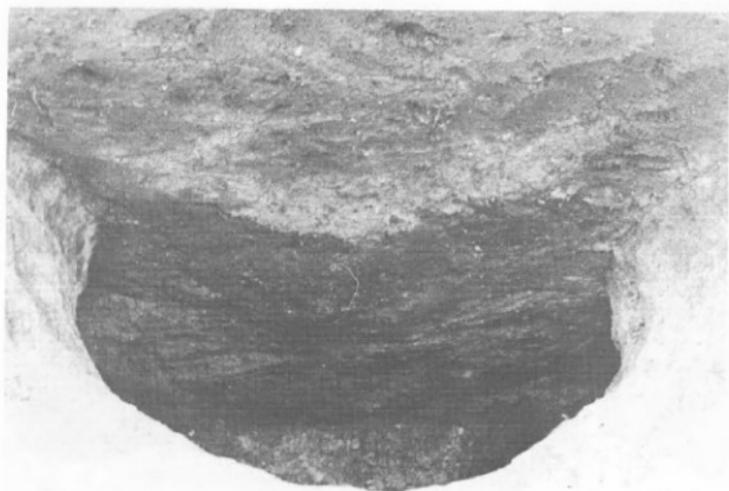


溝状遺構における土器出土状態

図版 4

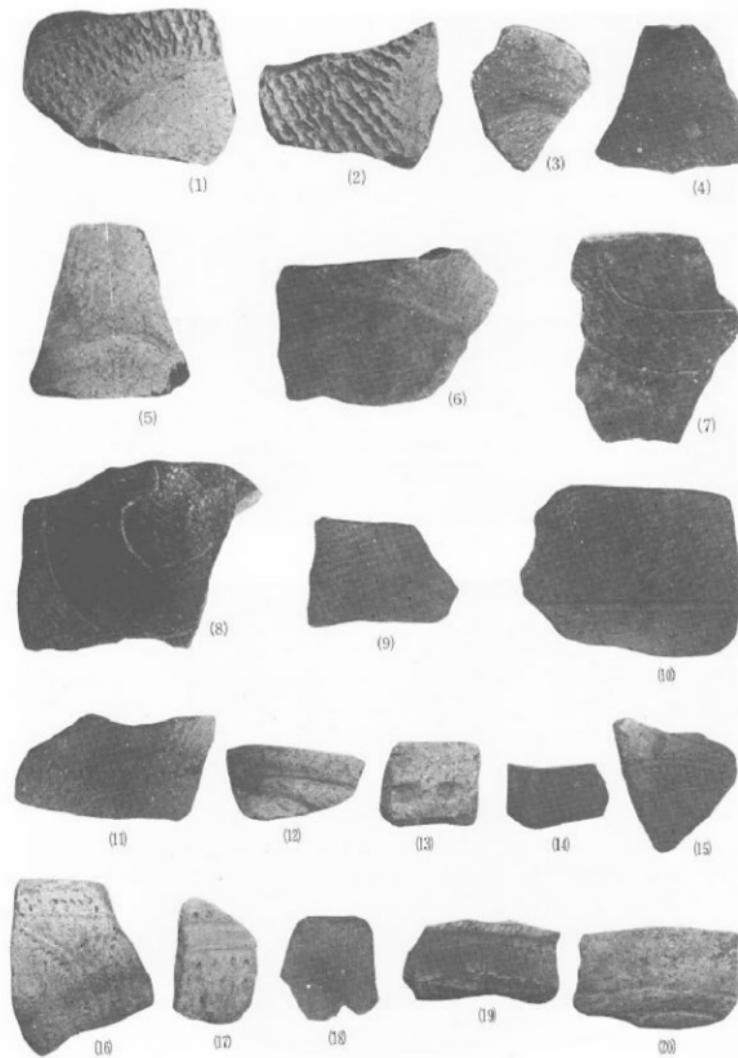


2号 フラスコ状ビット

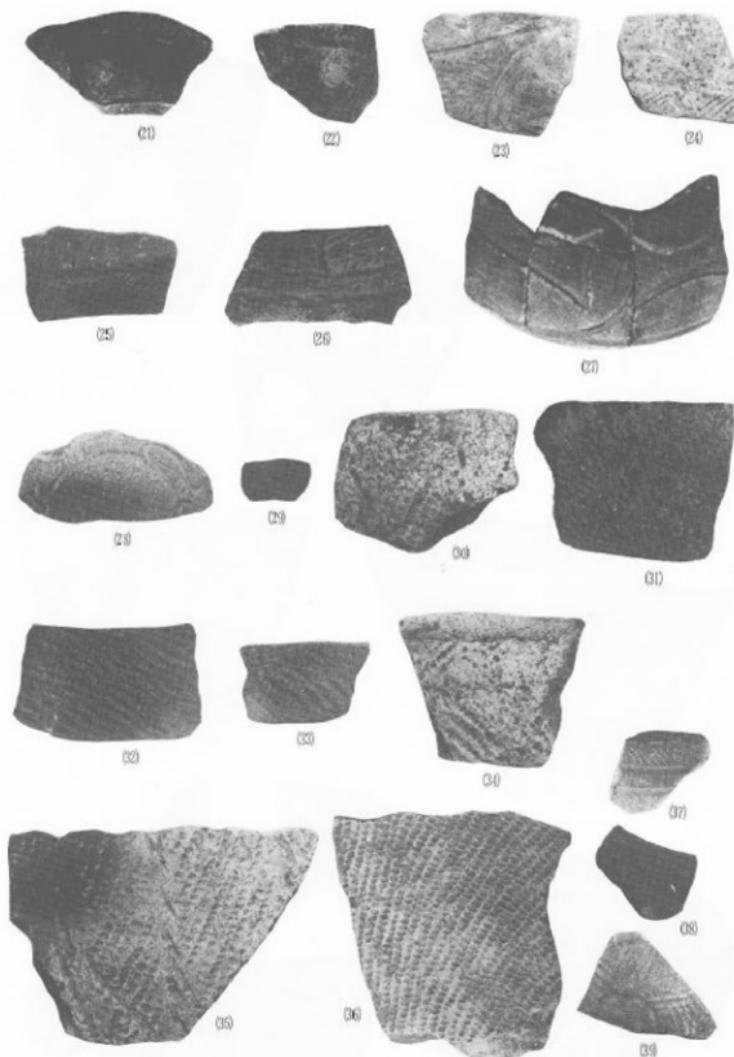


フラスコ状ビットの断面

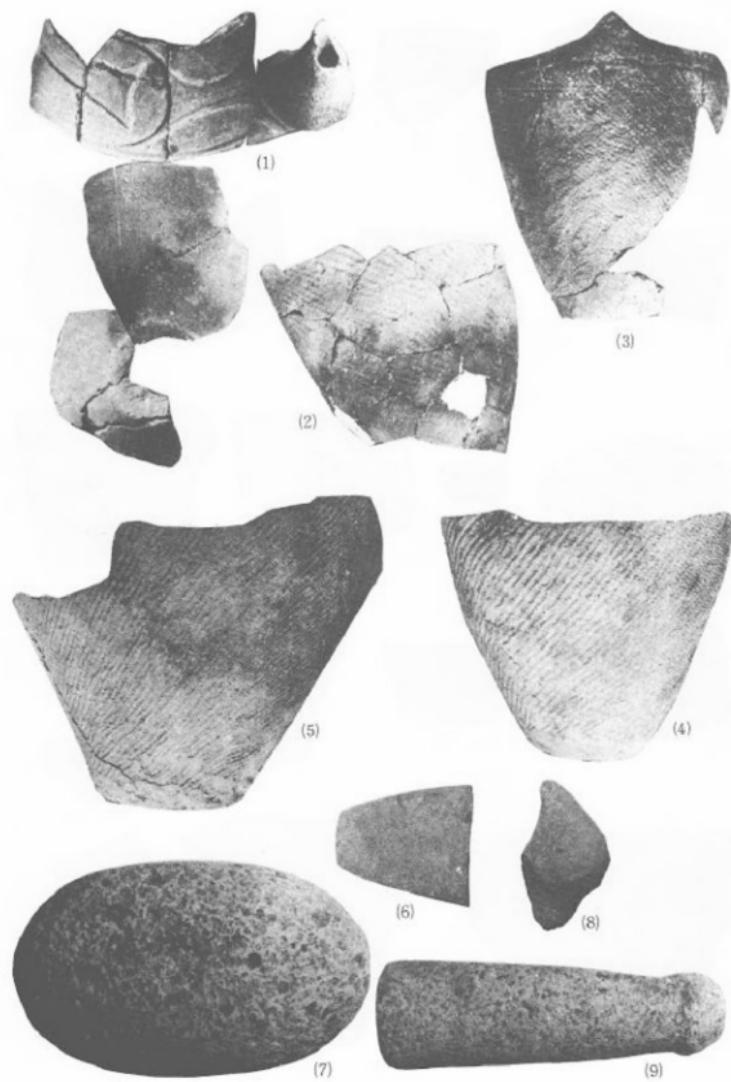
図版5



図版 6



圖版7



II 石坂上遺跡

① 調査方法と過程

台地縁の崖面に認められる、遺構の上部斜面に調査地点を定めた。調査はグリッド方式によった。

調査日誌

10月25日（土） 晴

C 6 から方形の小ピット 2 個を検出。A 4 にも同形のやや大きなピットが発見される。

10月26日（日） 晴

A 4 のピットの調査と A 1・2 にわたるピットを調査。午後地形の測量をする。出土遺物は、縄文土器片 4 点のみ。

10月27日（月） 晴

検出されたピットの実測を行い、午後 3 時発掘調査を終了す。

② 遺構と遺物

遺構（挿図 3～6、図版 1～2）

1 号竪穴遺構は、南北 1.62m、東西 1.86m、深さ 0.35 m あり、床面まで黒褐色土が続き、土器片や柱穴は認められず、床面までの落ちこみはゆるやかである。

2 号竪穴遺構は、南北 1.62m、東西 1.60m、深さ 0.34 m あり、1 号と同様の埋土で、土器片や柱穴は認められない。

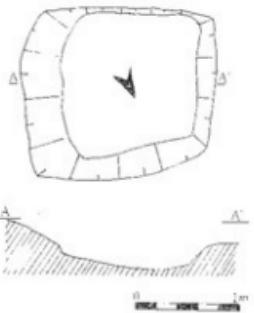
3 号竪穴遺構は、現存部南北 5 m、東西 3.5 m、深さ 0.67 m で西側は土砂採取によって削りとられており、その全形は不明である。埋土は、粘土ブロック混入茶



挿図 1 遺跡地形図



挿図 2 遺構配置図



挿図3 1号竪穴遺構

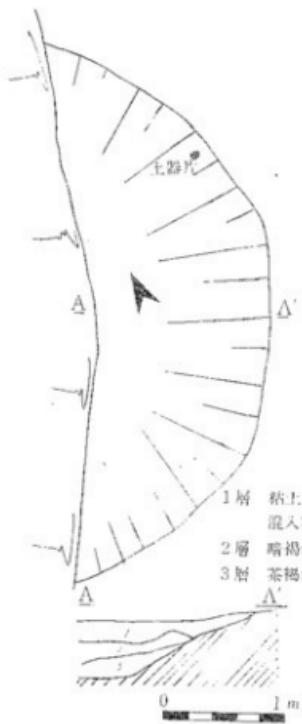


挿図4 2号竪穴遺構



挿図5 3号竪穴遺構

- 1層 粘土:ブロック混入茶褐色土
- 2層 暗褐色土
- 3層 灰色粘土
- 4層 黄褐色土



挿図6 4号竪穴遺構

褐色土、暗褐色土、灰色粘土、黄褐色土の4層からなる。

4号竪穴遺構は、現存部南北4.40m、東西1.45m、深さ0.50mで、埋土は、粘土ブロック混入茶褐色土、暗褐色土、茶褐色土の4層で、西側は3号と同様削りとられており、その状態は不明である。

遺物（挿図7 図版2）

土器

本遺跡からの出土遺物は、縄文土器片4点のみで、全て4号竪穴遺構の埋土からである。

挿図7の1は、口縁部無文で胴部にR Lの縄文があり、表面に黒色の炭化物が付着している。器壁の厚さ0.6cm、胎土に雲母片を含み、口縁部がくの字に外反する壺の破片で灰褐色を呈する。2~4は、R Lの縄文が見られ、器壁の厚さは0.7cmあり、胎土に雲母片を含むものである。

③ ま と め

すでに述べたように、調査によって発見された小型の1号、2号竪穴遺構は、ほぼ方形を呈するものである。しかし、これより大きい3号、4号竪穴遺構は、過半が削り取られてその全形はつかめていない。

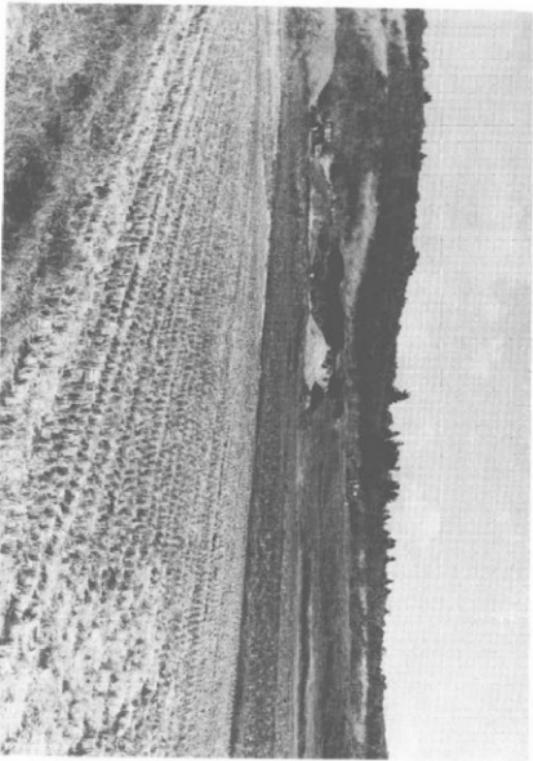
出土遺物は、4号竪穴遺構から出土した土器片だけである。外反する口縁部を持ち、繩文の施文された薄手、焼成良好なもので、繩文後期と思われるものである。床面からはなれた位置で発見さ

れており、遺構は土器片とそうはなれた時期ではないと思われるが、性格などは不明である。

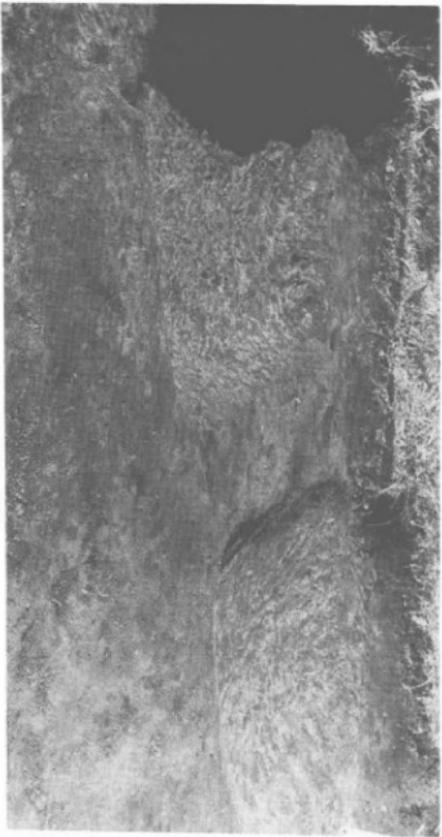
最後になりましたが、繩文中期末の住居跡と土器の編年について、県立博物館富樫泰時氏、秋田市教育委員会菅原俊行氏に色々ご指導をいただきました。石器の石質については、県立博物館加藤万太郎氏にご教示をいただきました。記して厚く御礼を申しあげます。



挿図7 土 器 拓 影

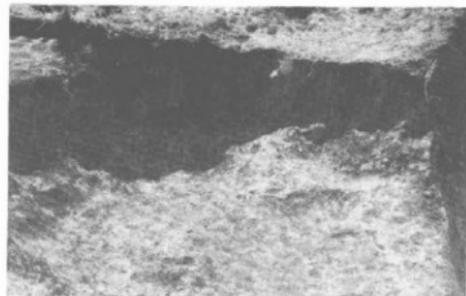


遠 岸 遠 景

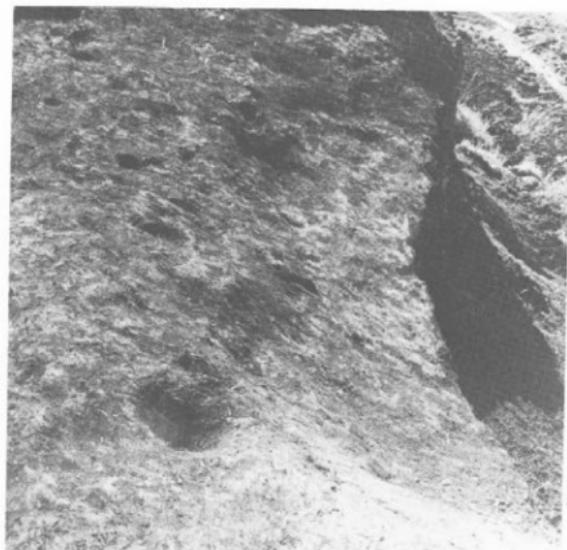


1 號、2 號 竪穴遺構

图版 2



3号竖穴遺構



4号竖穴遺構



4号竖穴遺構出土土器